

## 開山堂

このお堂は日光山（現・輪王寺）の開祖で修行僧であった勝道上人をまつています。上人は奈良の仏教を学んだ後、日光山に寺院を建立するため、10人の弟子とともに日光を訪れました。日光山を開山した後、勝道上人は八十三歳という高齢で遷化し、この谷の上部で荼毘に付され埋葬されたといひます。

1617年に行われた東照宮建立のおりに、この開山堂は建立され、彼の遺骨が開山堂の後ろに（ある廟所に）移されました。廟所の特徴は、様々な形の五つの石で作られた、五重の仏塔です。

17世紀に作られたものですが、勝道上人が生きた時代の様式をイメージして作られており、輪王寺でも最古の建物様式だと言えるでしょう。勝道上人に加えて、開山堂には彼の弟子の内の十人の弟子、そして地蔵菩薩を祀っています。毎年、輪王寺の開山に感謝するために、（新暦の）四月一日にここ日光で追悼の法事が催されています。七月十三日には、この世を去った先祖の霊を供養する盆祭りのための儀式も開かれています。

この堂の後ろに位置する高い崖は“仏岩”として知られています。岩盤表面の一部分が仏陀の顔に似ているとされ、このような名前がつけられました。しかしながら随分前にその岩は崖から落下しており、現在ではそのイメージは無くなり、名前だけが残っています。崖の下にはいくつもの壊れた石像が見受けられます。東照宮の内部の聖域が崖の上にあることから、そこから剥がれ落ちたのではないかという説が残っています。